

バイロンと「海」  
— 『ドン・ジュアン』と『マゼッパ』を読む —  
Byron's Sea in *Don Juan* and *Mazeppa*

中村 博文<sup>1</sup>

概 要

海は生命の源である。太古の昔、海中で原始的な生命が誕生し、次第にそれが高等化した。最初の脊椎動物である魚類は、海中生活に適するようにエラで呼吸していた。やがて、彼らは上陸し、それとともに陸上生活に適した肺呼吸が始まる。最初、大気中の二酸化炭素量が極めて多く、その温室効果のため陸上の気温はかなり高かったといわれているが、次第に二酸化炭素が減少して大気中の気温が下がり、陸上は生物が生活するのに適した環境になったようだ。陸上の生物は、主として森で暮らすようになる。

人類の先祖も森の住人であった。現代の大都市の中で、人々は緑の植物を生活の中に取り入れガーデニングが世界的なブームを呼んでいるのも、人々の原始回帰願望を表しているのかもしれない。そして、文学作品の中でも、森への憧憬は随所に見受けられる。森はしばしば海と同義で用いられているのではないか？ 日本語でも、鬱蒼と茂る大森林は「樹海」と表現される。森への憧憬は、同時に生命の故郷である海への憧憬をも意味するようだ。

本稿では、イギリス・ロマン派詩人の中でも、とりわけ「海」を愛した、バイロンの作品を中心として、「海」と「森」のイメージを探ってみたい。

キーワード：詩人と海 The Poet and the Sea

(序)

文学作品に登場する海は、しばしば人生の試練の場を象徴する。海上を航行する船を操る人物がその試練を受ける。順風満帆の航海を祈りつつ出航するが、海上には突然嵐が発生し、大波がうねる。それによって船が翻弄されるのは、まさしく逆境に陥ったときの人生を意味する。巧みな舵取りにより、無事嵐の海上を突破できる幸福に恵まれる場合もあるが、最悪の場合船は波に吞まれ転覆し、乗員もろとも海底の藻屑と消える。西洋では古く Homer の *Odyssey* 以来、海を舞台とする文学作品が数多く存在し、いずれの作品においても、海上を航行する登場人物は様々な試練を受ける趣向になっている。

Byron も、海をこよなく愛した詩人の一人で、彼の作品中にしばしば海が登場する。本稿では、*Don Juan Canto II* を中心に、主人公一行を乗せた船が嵐で遭難し、主人公唯一人が生きて浜辺に漂着するまでを、他の作品とも比較しながら詳しく読んで行きたい。

---

1 Hirofumi NAKAMURA 千里金蘭大学短大部生活文化学科 (受理日：2009年10月1日)

( I )

Byron 作 *Don Juan*(Cantos I-II 1819年、Cantos III-V 1821年、Cantos VI-XIV 1823年、Cantos XV-XVII 1824年)は、彼の作品中最大のもので、ottava rima の詩形で書かれた風刺物語詩である。そもそも Don Juan という主人公の名前は、16-7世紀スペインの劇作家 Tirso de Molina の *El burlador de Sevilla*(1630年)に登場する漁色放蕩の男子名である。フランスの Molière もこの人物をもとに劇作品を書いているし、Mozart のオペラ *Don Giovanni* は、Don Juan のイタリア語読みであることは言うまでもない。いずれの作品においても、好色貴族 Don Juan が石の騎士をののしり嘲笑するが、宴席上にその石像が復讐のために登場し、Don Juan は地獄に墮ちる。

Byron の *Don Juan* でも、オリジナル作品と同様に、放蕩三昧に耽る主人公が登場する。だがそれは、神をも恐れぬふしだらな主人公を結末で地獄へ落としお仕置きするという、いわゆる勧善懲悪的な Don Juan 伝説を継承しているとはいいがたい<sup>1</sup>。本稿で取り扱う部分では、主人公は航海の途上嵐と遭遇し、自分以外の全ての同乗者を失った挙句、ほうほうの体で異国の海岸に漂着し、土地の娘に救助され一命を取りとめる。作品全体を通して彼の運命は、上昇と下降を繰り返し、まさしく「塞翁が馬」の喩えを地で行くかのようなものである。

Don Juan はスペインの Seville に生まれた(Canto I, 8)<sup>2</sup>。父親は Don José と称し、スペインで Don は、Hidalgo(下級貴族)を示す(I, 9)。Juan はやがて生長して16歳になったとき、母親の知人の一人で既に人妻だった23歳の Donna Julia と出会い、淡い恋心が芽生える(I, 69-71)。Julia の方も相手に関心を示すどころか、次第に恋心を募らせ所作に落ち着きを失うが、努めて平静を装う(I, 72-82)。やがて二人は蜜会を重ねるまでに至り(I, 102-120)、とうとう彼女の夫 Don Alfonso によって両者の逢引は発見される。夫と Juan は、現場で流血の格闘を始める(I, 134-187)。この事件のお陰で、Juan は、これまでのいけない振る舞いを改めるため("To mend his former morals, or get new,"(I, 191, l. 3)、母親により Cádiz の港から旅に出される。

Canto II は、Juan の一行が Cádiz を "Trinidad" (II, 24, l. 1)号で出航するところから始まる。一行は、主人公以外に3人の従者、そして家庭教師の Pedrillo の合計5人である(II, 25)。“The wind was fair,” (II, l. 2)と、追い風の中順調な出発だが、続いて語り手は、“A devil of a sea rolls in that bay,”(l. 3)と述べ、この海域ではそれが珍しいことではないと付け足すようだ(l. 4)。

果たせるかな、夜の訪れとともに海上に疾風が生じた(26, ll. 1-2)。風は益々強くなり、語り手は、

At one o'clock the wind with sudden shift  
Threw the ship right into the trough of the sea,  
Which struck her aft, and made an awkward rift,  
Started the stern-post, also shatter'd the  
Whole of her stern-frame, and ere she could lift  
Herself from out her present jeopardy  
The rudder tore away: . . . (27, ll. 1-7)

と述べているように、とうとう船尾に亀裂が入り舵がちぎれ飛んでしまった。その結果、船内4フィートの深さまで浸水をきたした(27, l. 8)。ポンプで水を汲み出す人、船内に逆る水の浸入口をシーツ、シャツ、襪切れなどで塞ごうと必死の人たちなどで、慌しく緊張した雰囲気が続く(28-9)。

翌日の夕刻、再び風は強まり、

The wind blew fresh again: as it grew late  
A squall came on, and while some guns broke loose,  
A gust — which all descriptive power transcends —  
Laid with one blast the ship on her beam ends. (30, ll. 5-8)

スコールとなり、一吹き風はこの船を横倒しにしてしまう。転覆した船に乗船していた人たちは、マストを切断しやっとの思いで船を元に戻す(32)。パニックに陥った人たちは、アルコールを呷り気分を宥めようとするが(33-4)、それに対し主人公は、

'Tis true that death awaits both you and me,  
But let us die like men, not sink below  
Like brutes: . . . (36, ll. 3-5)

と彼らを諭し、冷静な態度を見せる。

依然一抹の希望を抱き、彼らは懸命にポンプで水をかい出したり帆布を修理するといった作業を続けるが、その間も浸水は続く(38-39)。おまけに船は舵を破損しているため、進路も風任せ波任せだ。尚一層悪いことに、水や食糧も底を突き始めている。ついに熟練した船大工が登場し、船の修理はもはや不可能だと匙を投げる(43)。急速に船首から沈み続ける船上では(44)、人々は守護聖人に祈ったり、救命ボートを巻き上げ舷側に下ろそうとしたり、死装束のつもりか"best clothes"(45, l. 2)で着飾ったりと、人それぞれに緊迫した現状に対処している。パニック状態の下では、身分、地位、教養などの区別はなくなり("all distinction gone," 44, l. 2)、たとえ傍目には無分別だとみなされたとしても、彼らは見境なく救われることを渴望する。

やがて母船は沈没し、人々を満載した二隻のボートが母船から遠ざかる(51)。沈没する母船は以下のように描写されている。

Then rose from sea to sky the wild farewell,  
Then shriek'd the timid, and stood still the brave,  
Then some leap'd overboard with dreadful yell,  
As eager to anticipate their grave;  
And the sea yawn'd around her like a hell, (52, ll. 1-5)

海はまさに"hell"のようで、死に行く人々を墓場に迎え入れる。ここでは"grave"や"hell"などが不吉で重々しいムードをかもし出し、更に"one who grapples with his enemy,/And strives to strangle him before he die."(ll. 7-8)と、宛ら殺戮が行われている戦いが、前面で繰り広げられているかのようである。

同作者による *Childe Harold's Pilgrimage* Canto IV(1812年、以下 *C.H.P.*と略す)巻末で、海は以下のように描写されているのは興味深い。

Roll on, thou deep and dark blue ocean — roll!  
Ten thousand fleets sweep over thee in vain;  
Man marks the earth with ruin — his control  
Stops with the shore; — upon the watery plain  
The wrecks are all thy deed, nor doth remain  
A shadow of man's ravage, save his own,  
When, for a moment, like a drop of rain,  
He sinks into thy depths with bubbling groan,  
Without a grave, unknell'd, uncoffin'd, and unknown. (IV, 179)<sup>3</sup>

"Ten thousand fleets"も海に対しては無力であり、殺戮を続ける人間の力の及ぶ範囲は陸のみである。人は一滴の雨水の如く、跡形もなく海の深みに飲みこまれて行く。Juan一行を乗せたボートも、もはや風前の灯火のように、いつ何時海底の藻屑となり消え去るかは分からない。

だがC.H.P.では、上記の引用に続いて第183スタンザに至り語り手は、

Thou glorious mirror, where the Almighty's form  
Glasses itself in tempests; in all time,  
Calm or convuls'd — in breeze, or gale, or storm,  
Icing the pole, or in the torrid clime  
Dark-heaving; — boundless, endless, and sublime —  
The image of Eternity — the throne  
Of the Invisible; even from out thy slime  
The monsters of the deep are made; each zone  
Obeys thee; thou goest forth, dread, fathomless, alone.

と述べる。海は"the glorious mirror"であり、いかなる時にも"the Almighty's form"を写している<sup>4</sup>。つまり、海は全能者もしくは神の意思を表し、一見人間に対し盲目的な破壊をもたらすようでも、永遠の中で観照すれば、人に対する海の恩寵も理解できるようになる。たとえ悲惨な海難事故が後を絶たなくとも、人々は海に対し憧れを抱き、海の光景を眺めて癒しを得たり、海がもたらす豊かな恵みに与ろうとするものだ。海も含めあらゆる自然は、人間の意志とは無関係であり、時には人に対し好意的に見え恵みをもたらすが、冷酷で無慈悲に人を破滅させることも無視できない<sup>5</sup>。

ともあれ、C.H.P.の上記の部分では、海を崇める語り手の、好意的なムードが伝わってくる。それは、"glorious", "the Almighty's form", "sublime", "The image of Eternity"などの表現が示している。

再び *Don Juan* に戻る。依然漂流を続けるボートの中で、とうとう全ての食糧が尽きてしまった時(II, 69)、"hunger's rage grew wild:"(70, l. 6)となり、恐るべき出来事が生じる。Juan 一行が道連れとしていた spaniel 犬が殺され、食べられてしまうのである(70, ll. 7-8)。更にその数日後、"The longings of the cannibal arise/(Although they spoke not) in their wolfish eyes."(72, ll. 7-8)と、仲間の人間の肉を食したいという渴望が生じてきた。犠牲となる人物は、籤で決められることになり、運悪く Juan の家庭教師 Pedrillo が籤を引いてしまった(75)。

彼の体が、船医により解体される様子を見てみよう。

The surgeon had his instruments, and bled  
Pedrillo, and so gently ebb'd his breath,  
You hardly could perceive when he was dead. (76, ll. 2-4)  
.....  
And first a little crucifix he kiss'd,  
And then held out his jugular and wrist. (76, ll. 7-8)

医師は Pedrillo の頸静脈と手首の血管を刺し、失血死させたようだ。これは瀉血(刺絡)と呼ばれる治療法で、悪い血のうっ血した静脈を刺して、その汚れた血を排出させ病を快方へと向かわせるのが本来の目的である。だが、ここでは人命を絶つ目的でこれが用いられた。

更に医師は、

The surgeon, as there was no other fee,  
Had his first choice of morsels for his pains;  
But being thirstiest at the moment, he  
Preferr'd a draught from the fast-flowing veins: (77, ll. 1-4)

と述べられている点から、Pedrillo の血を飲み渴きを癒した。S. T. Coleridge の *The Rime of the Ancient Mariner* では、老水夫が石弓でアホウドリを撃ち落した後、彼の船は呪いを受け海上で幾日も風が続く (ll. 115-8)<sup>6</sup>。周囲には不気味な沈黙が立ちこめ、銅色の空には、真昼の太陽が血のように輝いている。

All in a hot and copper sky,  
The bloody Sun, at noon,  
Right up above the mast did stand,  
No bigger than the Moon. (ll. 111-4)

甲板上の水夫たちは、舌の付け根まで干からびる程に咽喉の渴きを覚えるが("And every tongue, through utter drought,/Was withered at the root;" ll. 135-6)、一滴の飲み水も得られない。

Water, water, every where,  
And all the boards did shrink;  
Water, water, every where,  
Nor any drop to drink. (ll. 119-22)

やがて遠方から接近する船を目撃した船員たちは、渴ききった咽喉から笑い声も泣き声も出せず (ll. 157-9)、老水夫は自身の腕を噛み血を吸って声を出し、船の到来を知らせるといふ異様な行動をとる ("I bit my arm, I sucked the blood,/And cried, A sail! a sail!" ll. 160-1)。この場でも、人間の血液を飲んで渴きを潤すのは興味深い。そもそも、アホウドリを射落とした後、老水夫達は呪いを受け、海上では超自然的な怪奇現象が生じていた。魑魅魍魎が出没するが如き海上に浮かぶ船上で、乗組員たちも理性を失い狂気の沙汰へと駆り立てられていくのは、不自然ではない。

*Don Juan* Canto II で、Pedrillo の命を絶った船医は、その報酬として優先権を与えられ、死体から血をすすり飲んだ。続いて他の乗船者も、人肉のお相伴にあずかる (77-8)。だが、数人の vegetarian と思しき人物、そして主人公はそれを拒む (78)。なぜなら、主人公にとって Pedrillo は "his pastor and his master." (78, l. 8) であり、いかに飢餓に陥っているとはいえ、主人公の理性が、自分の精神面での指導者の肉を食べることを許さなかったのだ。

果たせるかな、人肉を食べた人々に異変が生じる。

For they, who were most ravenous in the act,  
Went raging mad — Lord! how they did blaspheme!  
And foam and roll, with strange convulsions rack'd,  
Drinking salt-water like a mountain-stream,  
Tearing, and grinning, howling, screeching, swearing,  
And, with hyaena laughter, died despairing. (79, ll. 3-8)

人々は狂乱し、自暴自棄となり死に果てた。人肉を食するという cannibalism は、大部分の人間社会ではタブー視されており、およそ理性的な人ならそれを口に出すことすら差し控える。だが、主人公一行と同船の人々の間で、このタブーが敢えて冒され一人の人間が犠牲となった。禁断の果実を食したかどで楽園を追放された Adam と Eve、天上の火を人間に伝え岩山に三千年間鎖で繋がれた Prometheus などはすべて、厳しいタブーを破ったために罰を受けた<sup>7</sup>。*Don Juan* Canto I では、既婚者 Julia との不義で主人公は、他国へ逃れれざるを得なくなった。不倫により、主人公はタブーを破ったと考えられる。この作品全体では、タブーを敢えて冒す場面が、あたかもロンドの如く繰り返し登場するように思える<sup>8</sup>。

主人公を含め今や四人となったボートは(101, l. 4)、やがて陸に接近し、接岸の直前転覆してしまった(104)。四人のうち一人は鯨に食われ、二人は溺れ死んだため、結局生きて浜にたどり着けたのは主人公ただ一人に過ぎなかった(106)。その彼とて、

And there he lay, full length, where he was flung,  
Before the entrance of a cliff-worn cave,  
With just enough of life to feel its pain,  
And deem that it was saved, perhaps, in vain. (108, ll. 5-8)

と述べられていて、瀕死の状態であり、この段階では決して死を完全に免れたとは言いがたい。続いて彼は周囲を見渡すが、

And as he gazed, his dizzy brain spun fast,  
And down he sunk; and as he sunk, the sand  
Swam round and round, and all his senses pass'd:  
He fell upon his side, and his stretch'd hand  
Droop'd dripping on the oar, . . . (110, ll. 1-5)

あたかも砂浜が、ぐるぐる回転しているかのように目眩を感じ、気を失い倒れこむ。

How long in his damp trance young Juan lay  
He knew not, for the earth was gone for him,  
And Time had nothing more of night nor day  
For his congealing blood, and senses dim;  
And how this heavy faintness pass'd away  
He knew not, till each painful pulse and limb,  
And tingling vein, seem'd throbbing back to life,  
For Death, though vanquish'd, still retired with strife. (111)

生死の境目を未ださ迷い続ける主人公の五感麻痺し、時間の経過や空間的な位置関係も定かではない。だが、執拗に彼の生命を奪い去ろうとする死も、ようやく彼のもとから引き下がり、"painful pulse and limb"そして"tingling vein"により、彼は自分が蘇生しつつあることを感じる。脈打つ際や四肢が感じる痛みこそ、生の証であるかのようだ。

朦朧とした意識から回復するに連れ、彼は目前に"A lovely female face of seventeen."(112, l. 8)を認める。彼女は瀕死の主人公に"cordial"(114, l. 1)を飲ませ、ほとんどむき出しの手足に覆いをかけたり、濡れた頭髪を絞ったりと、細かな気配りに余念がない(114)。そして主人公を、侍女の助けで抱きかかえ、洞窟の中に運び込んだ(115)。

このうら若い女性は"Haidee"(128, l. 1)という名で、海賊"Lambro"(III, 26, l. 1)の一人娘だ。荒っぽい気性の父親は、拿捕した船の金品を巻き上げるのみならず、船員たちも奴隷市場へ売り飛ばしていた(126)。他方、Haideeは、父親とは正反対の優しい心を持ち、侍女とともに瀕死の Juan に付き添って、食事にも細心の注意を払いつつ、彼の回復を心待ちしていた(123)。無論、彼女にとって主人公を父親のいる家へ運び込むというのは、ネズミを猫のところに連れて行くようなものだった(130, l. 3)。

やがて主人公はすっかり回復するとともに、Haidee と恋に陥り、父親の留守中二人で祝言まであげてしまった。だが、Canto III に至り、二人は帰宅した父親に発見され、Juan は捕らえられて奴隷として売られることになる。

(II)

海上で嵐に苛まれた Juan は、辛くも島に漂着し一命を取り留めることが出来た。時化の海ではなく、調教など全くされていない荒馬に縛り付けられ、長時間にわたる恐怖の疾走で激しい苦痛を与えられた主人公が登場する作品を、Byron は書いていて興味深い。試練を受ける場所は、*Don Juan* では海上であるのに対し、*Mazeppa*(1818年)では馬の背中だ。しかし、長く苦しい試練と、その後の救済というパターンは両作品に共通しているため、詳しく読んでみる<sup>9</sup>。

主人公 Mazeppa は、齢20歳の時ポーランド国王 John Casimir V の近習として王に仕えていた(II. 127-30)<sup>10</sup>。当時ポーランドには count palatine と称する伯爵がいて、彼の自領内では国王並みの特権を有していたため、王権伯とも呼ばれていた。その人物の妻 Theresa は、伯爵より30歳も若く、采配を振るう夫に嫌気がさし始めていた(II. 168-9)。彼女は若き Mazeppa を目にするや、"virtue"(I. 171)にも別れを告げ、彼に夢中になる。とは言うものの、両者はひたすら控えめにお互い接し合っていたようだ。

We met — we gazed — I saw, and sigh'd,  
 She did not speak, and yet replied;  
 There are ten thousand tones and signs  
 We hear and see, but none defines — (II. 232-5)  
 . . . . .  
 I saw, and sigh'd — in silence wept,  
 And still reluctant distance kept, (II. 244-5)

やがて両者は、夫人の部屋で密会するまでに至る(II. 298-300)。しかし、二人の秘め事はついに発覚し、多勢に無勢の主人公は武器を取り上げられ、一時は死をも覚悟する(I. 335)。彼は城門まで引き立てられ、荒馬に縛り付けられた(II. 358-74)。

その荒馬は、以下の如く描写されている。

A Tartar of the Ukraine breed,  
 Who look'd as though the speed of thought  
 Were in his limbs; but he was wild,  
 Wild as the wild deer, and untaught,  
 With spur and bridle undefiled —  
 'Twas but a day he had been caught; (II. 360-5)

この馬は、つい昨日捕まえられたばかりの野生馬で、全く調教を受けておらず、拍車も手綱も付けられた経験はない。そのため、彼を御することは困難きわまったであろう。そのような馬の背中に、主人公は沢山の革紐で縛り付けられた。突然鞭打たれた馬は、激しい疾走を始める。

Then loosed him with a sudden lash —  
 Away! — away! — and on we dash! —  
 Torrents less rapid and less rash. (II. 372-4)

群集を後に、城門から激しく疾走していく、主人公を縛り付けられた馬は、まるで人間社会から急速に遠ざかっていくかのようだ。辺りは未だ夜の闇に包まれているため、馬が疾走するコースは、主人公にはわからない(II. 376-7)。しかし、ひどい仕打ちを受ける主人公をあざ笑っている城下の人々のざわめきを最後に、彼は今後人間の声を聞く

ことはないだろう (ll. 379-83)。

All human dwellings left behind;  
 We sped like meteors through the sky, (ll. 425-6)  
 . . . . .  
 Town — village — none were on our track,  
 But a wild plain of far extent,  
 And bounded by a forest black; (ll. 429-31)

荒馬と主人公が通過する沿道には、人の住む気配は全く感じられず、際限なく森が広がっている。はるか遠方には、廃墟と化した砦の狭間胸壁が辛うじて認められ、"No trace of man"(l. 435)と人影がない分益々、その城址が侘しく思えてならない。

疾走する馬に革紐で縛られている主人公の体は、革紐による激しい摩擦で皮がすりむけ出血を来し、血液が滴り落ちている (ll. 460-1)。その時主人公は、喉の激しい渇きを覚える ("And in my tongue the thirst became/A something fierier far than flame."(ll. 462-3)。しかし、縛りつけられた状態の主人公は、身動き一つできず喉の渇きを癒すことなど不可能である。*Don Juan* では、ボートで漂流中の主人公一行は、耐え難い空腹と喉の渇きを覚え、船医が Pedrillo の血をすすり飲んだことは上述した。*Mazeppa* でも、この部分には喉の渇きと血のイメージが登場するが、主人公は血をすすすることは出来ず、いたずらに血は流れ落ちるに過ぎない。

やがて *Mazeppa* と馬は、"the wild wood"(l. 464)に接近する。その森は、主人公が "I saw no bounds on either side;"(l. 465)と述べるように、延々と広がっているようで、文字通り原始林(wildwood)である。林内の灌木の紅葉した葉が、冬の魁の風により吹き落とされることを描写する語り手は、

. . . those autumnal eves  
 That nip the forest's foliage dead,  
 Discolour'd with a lifeless red,  
 Which stands thereon like stiffen'd gore  
 Upon the slain when battle's o'er, (ll. 473-7)

と述べ、赤い紅葉を戦死者の固まった血糊にたとえようとする。更に、"every tombless head"(l. 479),"each frozen cheek"(l. 481)と、死体を連想させる描写が連続して用いられている。それは、血気に逸る若き武将 *Mazeppa* の激しい気性を示すと同時に、疾走する荒馬の通過する原始林が、supernatural な世界であることを示し、一種不気味なイメージをかもし出す。

馬の疾走がいかに凄まじいものであるかは、

Untired, untamed, and worse than wild;  
 All furious as a favour'd child  
 Balk'd of its wish; . . . (ll. 517-9)

と描写されている点から想像できよう。やがて主人公は、周囲の大地や空が回転するような感覚に陥り、また胸や頭が疼きだし、鼓動が停止した。更に、目に閃光が輝き、視力もなくなったようである (ll. 539-47)。

*Don Juan* でも、難破船から唯一人浜辺に漂着した主人公は、極度に衰弱し瀕死の状態であっていた。自身の死をも覚悟した主人公は、やはり激しい眩暈を感じている (*Don Juan* II, 110)。死の直前断末魔の中、人はこのような眩暈を体験するのだろうか。

. . . he who dies  
Can die no more than then I died.  
O'ertortured by that ghastly ride,  
I felt the blackness come and go,  
And strove to wake; but could not make  
My senses climb up from below: (ll. 547-52)

暗黒の死が、さながら振り子のように行ったり来たりし続ける。そして、生に戻ろうと意識するが、死に向かって薄らいでいく感覚を呼び戻せない。主人公はこのような状態で、生死の境界線上をしばらく、行きつ戻りつしていた。

だが、主人公の運命の転機が突然訪れる。

'My thoughts came back; where was I? Cold,  
And numb, and giddy: pulse by pulse  
Life reassumed its lingering hold,  
And throb by throb; till grown a pang  
Which for a moment would convulse,  
My blood reflow'd, though thick and chill;  
My ear with uncouth noises rang,  
My heart began once more to thrill;  
My sight return'd, though dim; alas!  
And thicken'd, as it were, with glass. (ll. 569-78)

主人公の思考力が戻るや否や、自分がどこにいるのか気になり始める。そして、感覚も戻り、脈打ち鼓動する毎に心臓の動きもゆっくりと正常な状態を取り戻そうとする。彼の視力も回復を始めると、まるでガラス越しに混濁しているように見えることに、彼は気付く。続いて彼は、

Methought the dash of waves was nigh;  
There was a gleam too of the sky,  
Studded with stars; — it is no dream;  
The wild horse swims the wilder stream! (ll. 579-82)

と述べ、馬が川を渡っていることを知る。更に主人公は、

The waters broke my hollow trance,  
And with a temporary strength  
My stiffen'd limbs were rebaptized. (ll. 587-9)

と述べるが、これはあたかも、彼が川の水で再洗礼を受け浄化され、再び生まれ変わったかのようなのである。

*Don Juan* でも、転覆したボートを捨て、Juan は海を泳いで、辛くも浜辺にたどり着いた。その後彼は、生死の進退窮まる状態を経て、Haidee に救われたという点から、彼が海水中を泳いだ行為は、baptism と考えられな  
いだろうか。Julia との過去をしっかりと清算するため、このような通過儀礼は必要であった。

とまれ、*Mazeppa* では、川を渡った主人公と馬は、"the slippery shore"にたどり着く。そこは、

A haven I but little prized,  
For all behind was dark and drear,  
And all before was night and fear. (ll. 594-6)

と述べられている点から、夜の闇に包まれた場所で、それが主人公に恐怖心を起こさせた。また、"slippery"という表現から、相当な湿気を含んだ土壌であると想像できる。即ち、そこは川と大地の境界が未だ曖昧な場所であり、それは読者に chaotic なイメージを与えるだろう。

馬は小高い土手の上まで上り、主人公は周囲を見渡す。その光景は、

. . . a boundless plain  
Spreads through the shadow of the night,  
And onward, onward, onward, seems  
Like precipices in our dreams,  
To stretch beyond the sight; (ll. 605-9)

と、果てしなく夜の闇が広がり、恰も夢に登場し、どんどん高くせりあがる断崖のようである。ここで少し想像力を逞しくして、次のように解釈することも不可能ではあるまい。つまり、先ほどの"slippery"という表現から類推し、この部分は、果てしなく広大な流域を流れ行く大河のイメージをかもし出さないだろうか。主人公と馬が渡った本当の川に続き、広大無辺なイマジナリーな大河が、延々と流れていると考えられよう<sup>11</sup>。

主人公が、

But nought distinctly seen  
In the dim waste, would indicate  
The omen of a cottage gate; (ll. 614-6)

と述べることから、人家などの形跡は全く存在せず、"Not even an ignis-fatuus rose/To make him merry with my woes:"(ll. 619-20)と、鬼火さえ出ないことを彼は、逆に不気味に感じているようだ。

荒馬の激しい疾走は、ようやく衰え始める (ll. 625-8)。あれほど凄まじい勢いで走った馬も、今や"A sickly infant had had power/To guide him forward in that hour;"(ll. 629-30)と述べられているほどに力を弱めている。やがて夜明けを迎え霞が消えると、周囲の大平原の全容がくっきりと浮かび上がってきた。依然辺りには深い沈黙が立ち込め、虫の音、鳥の囀りも聞こえてこない (ll. 661-4)。

もはやよろめきながら進む馬の前に、突然夥しい数の馬の群れが現れる。

A thousand horse, the wild, the free,  
Like waves that follow o'er the sea,  
Came thickly thundering on,  
As if our faint approach to meet; (ll. 684-7)

人に調教されたことはない野生馬の大群が、怒濤の如く押し寄せてきた<sup>12</sup>。だがその時、主人公が繋がれている馬は一瞬よろめき、かすかな嘶きとともに倒れ息絶える。

A moment staggering, feebly fleet,

A moment, with a faint low neigh,  
He answer'd, and then fell; (ll. 689-91)

続いて野生馬の群れが示す行動は興味深い。

They stop — they start — they snuff the air,  
Gallop a moment here and there,  
Approach, retire, wheel round and round,  
Then plunging back with sudden bound,  
Headed by one black mighty steed,  
Who seem'd the patriarch of his breed, (ll. 698-703)

主人公を背中に縛られたまま息を引き取った馬の姿は、野生馬の大群にとり奇妙に思えたに違いない。それ故彼らは、立ち止まり鼻で匂をかぎ、落ち着かない様子で辺りを疾走する。二人に接近したり、後退したりしながら周囲を旋回し続け、警戒心を捨てようとしなない。これは動物的本能に基づく行為であり、この場面では野生馬の群れが示す bestiality(獣性)と主人公の humanness が大きなコントラストを成している<sup>13</sup>。結局馬の大群は、二人をその場に見捨て森へと退散する("And backward to the forest fly,/By instinct, from a human eye.—"ll. 707-8)。

死んだ馬に依然繋がれたままの主人公は、彼自身が述べるように、"The dying on the dead!"(l. 715)であり、彼は救出される可能性を決して信じておらず、むしろ以下のように述べる。

To-morrow would have given him [Death] all,  
Repaid his pangs, repair'd his fall; (ll. 753-4)  
.....  
To-morrow would have given him power  
To rule, to shine, to smite, to save —  
And must it dawn upon his grave? (ll. 760-2)

明日こそ、死が支配者となり勝ち誇る日となることを、恰も確信するかのような主人公は、

I thought to mingle there our clay;  
And my dim eyes of death had need,  
No hope arose of being freed: (ll. 765-7)

と述べ、馬から解放放たれたいという望みも捨て、馬と自身の死体が混ざり合うことを考えている。

しかし、主人公が"the Cossack maid"(l. 817)により救出されるのは、Haideeにより救われた *Don Juan* の主人公と類似している。*Don Juan* では、父親に発見されないようにとの気遣いから、Haidee は Juan を密かに海岸の洞窟に運び込んで介抱したが、このコサックの娘は Mazeppa を"the nearest hut"(l. 845)に運び込み、そこへ彼女の両親も様子を伺いに訪れている (ll. 840)。無論、彼らには Mazeppa に対する敵意は見出せない。

*Mazeppa* では、若き時代の主人公の体験談を、今や老武将となった彼が、Pultawa(ウクライナの都市。ポルタヴァ。1709年、Charles XII 率いるスウェーデン軍がロシアの Peter 大帝率いる軍に敗れる)の戦いで敗走途中夜営を余儀なくされた Charles に、快い眠りへと誘う nightcap の目的で語り聞かせるというシチュエーションになっている。自身の数奇な体験を熱弁し終えた主人公は、敗走で疲労困憊した Charles や一座の武将たちに向かい、"What mortal his own doom may guess? —/Let none despond, let none despair!"(ll. 853-4)と激励する。

他方、Charles は "The king had been an hour asleep." (l. 869) と、既に一時間も前に寝入っていた。この場面は大変 ironical なようだが、Charles を快い眠りに誘うことが、主人公の物語の当初の目的であったため、少なくともこの目的は成功したといえる。

### (III)

本稿(I)で取り上げた *Don Juan* Canto II では、航海中の主人公一行の船が難破し、食糧と水がなくなるという困窮状態で、主人公だけが島に漂着し九死に一生を得た。その島では、海賊の娘 Haidee により彼は助けられた。

*Mazeppa* では、不義をはたらいたかどで、荒馬に縛り付けられた主人公は、馬の、想像を絶する凄まじい疾走により、生き地獄を体験する。だが、やがてどどり着く野生馬の棲息する土地で、馬は息絶え主人公も死を覚悟したものの、コサックの娘に救出された。*Don Juan* では「海」が、*Mazeppa* では疾走する「馬」が、主人公に耐え難い試練を与えることになる。一見無関係に見える海と馬が、作品中でいかなる意味を持つのか探ってみよう。

同作者による *C.H.P.* Canto IV の結末に程近い第184スタンザを読んでみる。

And I have loved thee, Ocean! And my joy  
Of youthful sports was on thy breast to be  
Borne, like thy bubbles, onward: from a boy  
I wantoned with thy breakers — they to me  
Were a delight; and if the freshening sea  
Made them a terror — 'twas a pleasing fear,  
For I was as it were a child of thee,  
And trusted to thy billows far and near,  
And laid my hand upon thy mane — as I do here.

作者 Byron が海をこよなく愛していたことは、このスタンザを読めば明確となる。この中で例えば、"on thy breast to be/Borne" や "And laid my hand upon thy mane" などは、馬や乗馬のイメージを併せ持つと考えられる。とりわけ、mane は馬の「鬣」の意で、まるで疾走する馬の鬣をつかみ乗馬を楽しむ如く、幼い頃から作者は大海原で波に乗って楽しんでいたようだ。また、この mane は、「大海原」をさす main と同音であり、それをあえて意識しながら用いられたといっても過言でない。要するに、作者にとって「海」と「馬」は、同義的なものであったに違いない。そして、功に愛馬を操れる騎手と馬との調和の取れた関係の如く、人と海もハーモニーを保ちながら共存を続けている。それは、*Don Juan* Canto II に登場する、主人公一行に様々な苦渋を与えた無慈悲な海ではない。

本稿(I)でも引用した *C.H.P.* Canto IV 第179スタンザで語り手は、地上で破壊を続け殺戮を繰り返す人間の力の及ぶ範囲は、あくまで陸上に限られ、海上では何一つ人間が成しうるものはなく、全ては海に破壊しつくされる点を強調する。この部分では、海の残虐無情な面が強調されており、これは人間との調和を保ち続ける温和な海のイメージとは程遠い。単に海だけではなく、自然界は温和な面と残忍な面の両面を持ち合わせていることを、作者は認識していたといえる。ただ、*C.H.P.* Canto IV の場合、海を絶賛する語り手の、海に対する好意的なムードが印象的である<sup>14</sup>。

*Mazeppa* では、主人公は嵐の海上の航海ではなく、荒馬に縛られ自由を極度に束縛された中で、激しい疾走に身を任せる。この馬は、捕まえられたばかりの野生馬であり、手綱を取り御することなど到底不可能だ。いかに剛健な武将であろうと、このような馬は意のままに操れず、ただ荒馬に翻弄されるばかりであろう。これは物語冒頭、敗走する Charles XII の兵士たちと野営する主人公の愛馬 Bucephalus とは、甚だコントラストを成す。それは、Charles が主人公に向かい、

... On the earth  
 So fit a pair had never birth,  
 Since Alexander's days till now,  
 As thy Bucephalus and thou: (ll. 101-4)

と尋ねる点からも明確である。つまり、Bucephalus と主人公は一心同体の如く、この馬はあくまで主人に忠実であるからだ。

[His horse] Obey'd his voice, and came at call,  
 And knew him in the midst of all:  
 Though thousands were around, — and Night,  
 Without a star, pursued her flight, —  
 That steed from sunset until dawn  
 His chief would follow like a fawn. (ll. 72-7)

星一つない真夜中、愛馬 Bucephalus は、"a fawn"のように主人に付き従う。"fawn"の持つ柔弱なイメージは、主人公を背中に縛りつけ疾走した野生馬とは全く異なる。老武将となった現在の主人公は、愛馬 Bucephalus を意のままに操り、両者が川や原野を素早く疾走し輝かしい功績を挙げていることを、Charles も称えようとする。それに対し主人公は、"Ill betide/The school wherein I learn'd to ride!"とすかさず答える。それをいぶかしく思った Charles は、"Old Hetman, wherefore so,/Since thou hast learn'd the art so well?"(ll. 109-10)と尋ねるが、主人公の過去など知らない Charles にとり、それは不自然ではない。

Mazepa 冒頭、Charles の率いるスウェーデン軍が野営する場面には、もう一つ興味深い部分がある。敗走途上の彼らの周囲には、敵軍が包囲網をめぐらし、極めて緊迫した状況の中で極度の疲労に見舞われ、彼らは一夜を明かす。

And in the depth of forests, darkling  
 The watch-fires in the distance sparkling —  
 The beacons of surrounding foes —  
 A king must lay his limbs at length. (ll. 27-30)

このようないわば逆境の中では、"For danger levels man and brute,/And all are fellows in their need."(ll. 51-2)と語り手が言うように、身分の高低に関わらず、そして人と動物の違いに関わらず、全ての生き物は互いに寄り添い、肌を触れ合いながらお互いに体を暖め合うものである。このような場合、人間と他の動物の区別が一瞬薄らぎ、言わば生命共同体が実現するといえよう。普段から愛馬との相性が良い主人公は、この夜も馬にブラシをかけたりしながら、手入れに余念がない。その姿は、Charles にとって殊更印象的だったに違いなく、彼は主人公に対し上述のように尋ねた。Don Juan Canto II の場合、沈没寸前の船内では、同船の人々が極端なパニックに陥り、祈りを捧げたり、死装束代わり的一张羅で身をやつしたりと、奇行ばかりが見受けられ、彼らには、建設的に難局を乗り切ろうとする態度は余り見出せなかった。従って、彼らの大部分は破滅する。既にこの段階で、船内の人たちは呪いを受けていたのだろうか。

Mazepa を縛り付けられ疾走し続けた馬も、動物的本能のシンボルとして登場している。しかし、この馬は Bucephalus と異なり、人との調和を求めることはない。あくまで、危険な本能むき出しの冷酷無情な存在で、嵐に猛り狂う海と類似している。

## (結び)

Mazeppa を縛り付けられ疾走した荒馬は、野生馬の大群と遭遇し息絶えた。前述のように、夥しい数の野生馬は、警戒しながら二人を遠巻きに観察し、結局「本能的に」森へと逃げ帰った。野生馬の群れに見捨てられた主人公は、"They left me there, to my despair,/Link'd to the dead and stiffening wretch,"(ll. 709-10)と述べ、死んで硬直しつつある荒馬に縛られたまま、彼は生きていた。この場面は、主人公と荒馬、そして野生馬の大群それぞれ相互の関係を大変象徴的に示している。

野生馬の群れは、主人公と荒馬をつぶさに吟味した後、二人をその場に残し森へと退散した。つまり、二人は野生馬たちに見捨てられたと解釈できる。死んだ馬はもはや無生物状態で、これは野生馬の大群が象徴する「獣」ではない。また、主人公も人間であり、馬と同族ではない。それを野生馬たちは本能により("By instinct")感得し、森の奥へと立ち去った。主人公は荒馬に縛られ、長時間の疾走を体験したことで、一見両者は congenial に思えるが、この疾走は主人公にとり甚だ不本意なものだった。また、最終的に荒馬は息絶え、背中に縛り付けられたままの主人公は、辛くも生きていた。従って、主人公は「死」からも突き放されたと言えよう。

*Don Juan* では、島の娘 Haidee に救われた Juan は、再び生气を取り戻し、その後奴隷として売り飛ばされたり、女帝の寵愛を受けるなど運命のめまぐるしい変転を繰り返す。他方、*Mazeppa* でも、主人公はコサックの娘に救出された後、"Ukraine's hetman"(l. 56)にまで昇進し、更にその後 Charles XII に寝返り、王の側近として仕えていた。絶えず浮き沈みを繰り返す自身の運命を潜り抜け、恰も馬を巧みに操る御者のように、強かに生き抜こうとする作者の姿が見えてくるようだ。

## (注)

1. *Don Juan* 伝説に関しては、ジャン・ルーセ著、金光仁三郎訳 『ドン・ファン伝説』(東京: 審美社、1988)に詳しい。とりわけ、石像の変身、饗宴への出席、主人公の地獄墮ちなどに対する言及がある。ただし、Byron の *Don Juan* と *Don Juan* 伝説との関わりについては、言及はほとんどない。また、Moyra Haslett, *Byron's Don Juan and the Don Juan Legend* (Oxford: Oxford University Press, 1997) では、Byron の *Don Juan* を *Don Juan* 伝説の中で位置づけ、比較検討を加えていて大変示唆的である。
2. 本稿中の *Don Juan* からの引用は全て下記に拠る。  
Jerome J. McGann (Ed.), *Lord Byron: the Complete Poetical Works* Vol. V (Oxford: Oxford University Press, 1986).  
併せて、下記の書も随時参考にした。  
Charles W. Hagelman, Jr. , Robert J. Barnes (Eds.), *A Concordance to Byron's Don Juan* (New York: Cornell University Press, 1967).  
小川和夫訳 『バイロン: ドン・ジュアン』2 Vols. (東京: 富山房, 1993).
3. Jerome J. McGann (Ed.), *Lord Byron: the Complete Poetical Works* Vol. 2 (Oxford: Oxford University Press, 1980).
4. William Wordsworth の *The Prelude* Book V ll. 366-390(W. J. B. Owen Ed. *The Fourteen-Book Prelude by William Wordsworth*, New York: Cornell University Press, 1985)に登場する少年は、夕刻ウィンドミア湖畔でフクロウの鳴き声を真似る。彼の「さえざり」に呼応して、森のフクロウたちは鳴き声で返事し林内は騒然とするが、はたとフクロウの鳴き声が止み、辺りに深い沈黙がたちこめる。その時、

. . . a gentle shock of mild surprise  
Has carried far into his heart the voice  
Of mountain torrents; or the visible scene  
Would enter unawares into his mind  
With all its solemn imagery, its rocks,

Its woods, and that uncertain heaven, received  
 Into the bosom of the steady lake. (ll. 384-90)

と、語り手は述べる。ここでは、自然界の一瞬の沈黙の中に、永遠の存在が姿を現すようである。C.H.P. の本稿で引用した部分でも、全能者の姿が嵐の中に現れるという点でいささか類似している。

5. Ernest J. Lovell Jr., *Byron: the Record of a Quest: Studies in a Poet's Concept and Treatment of Nature* (Connecticut: Archon Books, 1966), pp. 204-6. この論文の作者は、Byron の *Don Juan* に登場する海が、人に恩寵を与える温和な自然としての海ではなく、盲目的で破壊的な、人に敵対する存在として描かれている点を強調している。これは、人に癒しを与えてくれる、Wordsworth の "Tintern Abbey" などで言及される自然とは異なる。
6. Ernest Hartley Coleridge (Ed.) *Coleridge: Poetical Works* (Oxford: Oxford University Press, 1980).
7. Mark Storey, *Byron and the Eye of Appetite* (London: Macmillan Press, 1986), pp. 29-38. この作者は、*Don Juan* の作品全体に「食事」のテーマが散見される点を指摘している。そして、難破船上では、cannibalism が登場する点にも触れ、タブーを敢えて冒す場面は Julia との不倫も含め重要な意味を持つと論じている。ちなみに、*Childe Harold's Pilgrimage* Canto IV では、空腹でやつれ果てた牢獄の年老いた父親に、若い娘が自身の乳房からミルクを与え、老人を生き続けさせようとする、*Caritas Romana* のエピソードが登場する(148-151)。拙論、*On the Caritas Romana in the Fourth Canto of Childe Harold's Pilgrimage "Doshisha Literature "* No. 41, (English Literature Society of Doshisha University, 1998) で、やがて死ぬのが順当な老人を、若い娘が自分の乳を与えて生き続けさせようとするのは、時間の流れに逆行するようだが、このエピソードの後に登場するラオコーンのエピソードでは、大蛇が捲きつき今にも絞め殺されそうな親子の彫像への言及があり、二つのエピソードがコントラストを成していることについて論じている。ともあれ、*Caritas Romana* の美談に対し、*Don Juan* の cannibalism は猟奇的でさえある。
8. Byron 自身、義姉との近親相姦が噂されていた人物である。その一件がトラウマとして、彼の生涯に付きまといっていたのでは、とも考えられる。それが彼の作品中で、数々のタブーを扱うテーマを作り出したのかもしれない。
9. *Mazeppa* に関する以下の拙論も参照されたい。  
 『Byron の *Mazeppa* における"馬"の意味』"主流" 第45号 (同志社大学英文学会, 1984)。ここでは、*Mazeppa* に登場する荒馬を、Plato の *Phaedrus* で言及される、人の情念のシンボルである 2 頭の馬のたとえ話と比較検討し、更に D. H. Lawrence の *The Rainbow* で、主人公の Ursula が野生馬の大群と遭遇する場面とも比較した。  
 『ワーズワス「鹿跳びの泉」論考 — 鹿の逃走について』"金蘭短期大学研究誌" No. 32 (金蘭短期大学, 2001)。この中で、*Mazeppa* の荒馬の疾走と、*Hart-leap Well* の手負いの鹿が、13時間も走り続け息を引き取る場面を比較した。
10. Jerome J. McGann(Ed.) *Lord Byron: the Complete Poetical Works* Vol. IV (Oxford: Oxford University Press, 1986).
11. Wordsworth の *The Prelude* Book XIV に登場する、Mt. Snowdon 登山のエピソードは、この部分と少し類似しているように思える。語り手の一行が、山頂からはるか外界を見下ろしたとき、雲海の中に山々の尾根が、恰も海上に突き出た島のように見えた。作者にとり、雲海は本来の海に続く新たな海のように、本当の海を凌ぐほどの光景だった。この件に関しては、拙論『*Manfred* 再考 — 山の意味について』"金蘭短期大学研究誌" No. 30 (金蘭短期大学, 1999) でも詳しく論じておいた。
12. 注9で紹介した拙論のうち、"主流"掲載の論考で、野生馬の大群との遭遇に関し、D.H. Lawrence の *The Rainbow* の中の類似の場面と比較検討している。
13. Jerome J. McGann, *Fiery Dust: Byron's Poetic Development* (Chicago: The University of Chicago Press, 1968), p. 182.
14. Wordsworth の *Lyrical Ballads* 所収の "Tintern Abbey" では、フランス革命後の恐怖政治の時期を現地で

過ごした作者が、醜悪な人間関係に嫌気を示し、故郷イギリスの山河に癒しを求める様子が、5年前の思い出として述べられている。その当時の作者にとって自然は、

. . . For nature then  
(The coarser pleasures of my boyish days,  
And their glad animal movements all gone by,  
To me was all in all. . . . (ll. 73-6)

だったようで、その自然に癒しを求め、彼は人間世界から逃避したといえる。だが、彼の自然観もその後変化を遂げる。この点に関し、拙論『Byronの *Childe Harold's Pilgrimage* Canto IIIにおける「静」と「動』』"研究報告集" No. 31 (大阪私立短期大学協会, 1994) で、Wordsworthの "*Tintern Abbey*" から "*Peele Castle*" に至るまでの、彼の自然観の変遷について言及している。